

ごあいさつ（平成 21 年度）

「歯科心身医学の挑戦」



東京医科歯科大学大学院 歯科心身医学分野

教授 豊福 明

早いもので本学に赴任して丸 2 年が過ぎ去ってしまいました。

分野名をこの 4 月より「歯科心身医学分野」と改称できました。「歯科特有の」「歯科領域の」心身医学的問題に専念するために、そして「歯科医師が実践する」という意味を込めてのことです。学会とも整合性が取れ、歯科医学の一領域であることがより明確にできるのではと期待しています。

この春、初めて講義や臨床実習を担当した学生さんたちが、めでたく卒業し感慨もひとしおでした。

医科歯科大学の歯学部生は優秀です。本学は、その頭の良い、様々な才能に恵まれた学生、しかも仕事熱心、そういった歯科界の「上」の層を背負って立つ若者たちを甘

やかさずに競争させ、仕事の実力という面だけでなく、人間的にも現場で徹底的に鍛える場所であるべきと考えています。

学部学生の中には、通常の実習・講義のみならず、当科の大学院特別講義まで熱心に聴講する者もいました。頼もしいことだと大変嬉しく感じています。

これまで「どこの歯科を受診しても分かってもらえなかった」という歯科心身症患者さんが後を絶ちませんでした。しかし、今後はそのような悲惨な状況が、巣立って行った若い歯科医師たちによって、少しずつ改善されていくのではないかと期待しています。



なお臨床面には大きく力を注いでいます。

実は着任早々に、江藤一洋教授（現日本歯科医学会会長）から「臨床科なら、まずはしっかり臨床をやって欲しい」と言われておりました。平成20年度は、年間新患総数は約600人、受診者総数は7000名超、稼働率は前年の150%超でした。東北、中部、北陸、阪神、中国、九州など日本の全国各地はもとより、東南アジアからも受診された患者もおられます。限られた時間、人員とスペースの中、昼食返上でも診療してくれる若い先生たちの頑張りの賜物です。

しかし、その反面、外来がごったがえし、受診を希望される患者さんやご家族を長い間お待たせすることになり大変申し訳ありません。

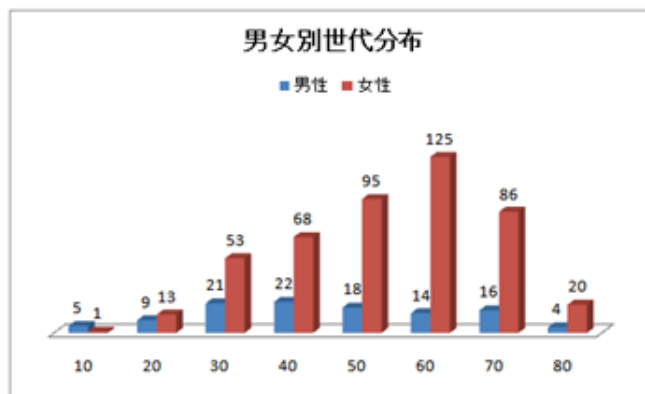
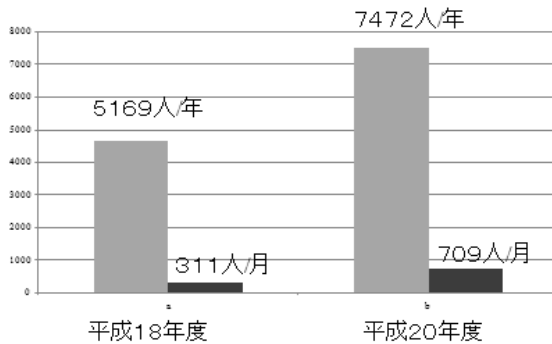
この領域は「治らないと意味がない」と考えています。無責任にたくさんの患者さんを引き受けて杜撰な治療をする訳にも行きません。歯科心身医学は「誰がやっても同じ、誰かに任せても一緒」というものでは「決してない」からです。

病気の性質上、再発・再燃の問題がつきものです。「手術しておしまい」とはいきません。何カ月にもわたるきめ細かい follow-up が必要です。中途半端に治療が中断することになれば、それまでに治療者・患者双方が治療のために支払ったエネルギーの代価としてはあまりに報われることが少ないのです。せめて、「ここまで来れば大丈夫」というところまで到達して、かかりつけの先生に逆紹介させて頂くことにしております。

また診断も数字や画像などで一目瞭然とはいきませんので、初診時にもかなりの時間と問診能力が要求されます。事前をお願いしております医科からの紹介状は、無駄な検査の繰り返しや合併する病気の見落としの防止、あるいは治療方針を検討する上でも必要不可欠なのです。

ひとりひとりの患者さんの治療を大事にしていきたいと考えております。どうかご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

当科外来患者数推移



平均56才(男性49.8才、女性57.5才)

昨年度、一番手が回らなかったのが研究面です。臨床研究の倫理面への配慮も昨今より厳しく求められるようになってきました。倫理指針の改定によりその事務手続きが煩雑さを増しほとんど困りました。特に臨床研究メインの当科では、前述のように多忙な診療業務に上乗せで事務的な手続きが加わることになり、慣れるまでが本当に大変でした。様々な制約から、期待していた脳機能画像研究も症例数が伸び悩みました。

ところが、数多くの患者さんを診れることは大きな強みです。歯科心身症の臨床的特徴を再検討し、診断基準のたたき台となるものを構築し、学会に報告できました。また従前から問題になっていた、歯科心身症と精神科の病気との差異も、精神科から

の紹介状を検討することで、40%の患者さんは精神的には問題がなく、うつ病など重い精神科の疾患である方はほとんどいないことが確認できました。

脳機能画像研究にしろ、対象疾患や病態をしっかり絞り込まないと何を観ているのか分からなくなってしまう。事前に臨床的な研究をしっかりしておくことで、結果的に今後の病態解明や、ひいてはしっかりした診療ガイドラインの策定にもつながるものと確信しています。

2年経って少しずつ学内外から認識されてきたのか、あちこちの先生との連携も以前よりぐっとスムーズに行くようになりました。医局も引っ越しし、メンバーも少し入れ替わりました。学生さんや研修医の先生たちもちょくちょく顔を出しては新しい風を吹き込んでくれます。大学院の先生たちも臨床に、研究に頑張っています。

「歯科心身医学の挑戦」は始まったばかりです。

10年、20年経って、どれだけの患者さんを救えたか、どれだけ研究業績が残せたか、そしてどれだけの人材を輩出できたか、真価が問われるものと考えております。

大事なものは目の前の患者さんたちです。歯や口の問題には歯科医師として力の及ぶ限りお役に立ちたいと考えています。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成21年5月